

# アートプロジェクトと観光、その現状と展望

磯 貝 政 弘

## Art project and tourism, its current state and prospect

Masahiro ISOGAI

要 旨：「大地の芸術祭」や「瀬戸内国際芸術祭」などをはじめ、「現代アート」を活用したプロジェクトが全国各地で催されるようになった。そのほぼすべてが過疎地の「まちおこし」や「経済効果」に狙いを定めたものである。本稿は、愛知県西尾市の佐久島の事例研究を中心にして、「アートプロジェクト」の成果と課題を探った結果、プロデューサーの存在と一定以上の予算あるいは長期間にわたる継続などの要件が満たされれば、観光交流人口の増加と知名度の向上という目的は比較的容易に達成できるものの、「まちおこし（地域おこし）」に関しては現時点では疑問符を付けざるを得ない可能性がみえてきた。また、地域おこしのために「アート」を活用することの意義について、とりわけ地域住民にどのようにして理解を求めべきなのかという大きな課題も仮説の一つとして浮かび上がった。

キーワード：現代アート、まちおこし、観光

### はじめに

現代の作家の作品を展示するアートフェスティバルが、規模の大小や開催期間の長短は別にして、日本のそこかしこで催されるようになった。

2016年から2018年までの3年間に開催されたアートフェスティバルから、開催期間が1カ月を超えるものを抽出しただけでも23を数える（付表参照）。これら以外にも、開催期間が1カ月に満たないものも相当数存在することが推察される。そうした中には、常設のアート作品にまつわる小規模かつ短期の展示会やイベントを季節ごとに年間通して開催するようなものもある。本稿で取り上げる愛知県西尾市の佐久島における「三河・佐久島アートプラン21」もそうした事例の一つである。

ところで、現代アートが持て囃される理由として次の二点を挙げることができるだろう。第一に投機対象としての経済的価値。19世紀末から続く「ヴェネチア・ビエンナーレ」はナショナリズムを煽り、そのうえで現代アートの経済的価値を高めてきたことから批判がなされてきた。そして、それらへのアンチテーゼとして1955年にドイツで「ドクメンタ」が開催され、今日まで続いている。「ドクメンタ」の開催地は人口約20万人のカッセルであり、大都市とは言えないこの都市に80万人の観覧者が来訪する。来訪者もたらす経済効果は大きく、また都市の知名度を飛躍的に高めたということから、「まちおこし」の成功例ともされている。第二の理由は、まさしくこの現代アートが「まち」や「地域」との関係性を持ったときに起こる効果への期待である。最近の日本各地で現代アートを活用したプロジェクトの隆盛もすべてそこに起因するといっても過言ではないだろう。ただし、横浜や名古屋のような大都市では、アートによって都市機能に新しい豊かさを付加することが目的とされる傾向がうかがえるのに対して、地方の市町村では過疎地対策として実行される傾向が強くみられる。

2000年に第1回が開催された新潟県越後妻有（現在の十日町市、津南町）「大地の芸術祭」も、そうした「過疎地対策」として行政が主体となって推進された事業である。そして、これが国内外から高い評価を得て、国際的なアートフェスティバルの一つとしての地位を獲得することになる。今世紀に入って、現代アートを活用したプロジェクトが全

国展開する契機はまさしくここにあるといえよう。

このような動きが広がるなかで、2011年に東日本大震災が発生した。そして、被災地の復興事業が様々な形で実行されたが、それらのなかでも注目されたものの一つが「現代アート」を使ったプロジェクトである。過疎対策という側面に加えて、被災地に生きる人々に希望を与えたという評価とともに、いわゆる「地域系アート」への期待は一段と高まったといえる。

本稿は、各地でアートプロジェクトが取り上げられるようになった経緯を振り返ったうえで、愛知県に所在する三河湾の離島佐久島において1996年から今に至るまで継続している「三河・佐久島アートプラン21」という具体的事例を検証し、現代アートを活用したプロジェクトが過疎の土地にどのような効果をもたらし、その一方でそのような新たな課題を浮き彫りにしてきたかを明確にするものである。

## 第1章 アートプロジェクトの原点

全国各地で数多くのアートプロジェクトが開催されるきっかけとして採りあげられるのが、ファーレ立川（東京都立川市）である。これは、東京都と立川市の要請により当時の住宅・都市整備公団が施行した米軍基地跡地再開発によって1994年に完成した街区である。再開発にあたり、立川市の新しい長期計画に掲げられていたまちづくりのテーマである「文化とやさしさ」の具現化として「アート」が導入されることとなった。そして、コンペの結果選ばれたアートプランナーが北川フラムである。

北川はファーレ立川のアートプランを進めるうえで、①多様性を埋め込むことによる「世界を映す街」<sup>(1)</sup>、②機能のアート化「機能（ファンクション）を美術（フィクション）に！」、③歩いて楽しめる「驚きと発見の街」という3つのコンセプトを立て、それらに沿って世界各地から招聘されたアーティストによる109の作品が街を彩ることとなった。それは日本における「パブリックアート」が本格的に始動する原点であったといってもよいだろう。

では、パブリックアートとは何か。北川はファーレ立川を計画するにあたり、その具体的なイメージを説明している。

ファーレ立川は「仕事に来る人」「買い物に来る人」にとっては非常に便利に作られています。これは人間を一つの属性からしかとらえていません。それだけではつまらないと思うのです。働きにくる人にとっても朝夕があり、昼休がある。目的以外の空間、時間の過ごし方というのが街にとっては重要で、いい街とか楽しい街とか記憶に残る街というのは、便利だけではないのです。

そういう街にするために、アートが少しでも関われないのだろうかと思い、アート計画を考えました。<sup>(1)</sup>

アートがどのように街と街を往来する普通の人々と少しでも関わるができるためには、北川がアーティストに求めたことは「サイト・スペシフィック（Site-Specific）」であった。作品が設置される場の特性を生かした作品や制作方法を指す美術用語だが、日本を代表するアーティストのひとりである川俣正の解説を記憶にとどめておきたい。

「サイト・スペシフィック」とは、この時この場でしかできないというミニマルなモチベーションの中にある可能性が、新たな場を顕在化してくれる最も有効な手段のことである。それは地球規模の環境問題や、都市や生活空間を考えることから、歴史的、政治的、文化的な場の成り立ちまで含まれる。

文化背景のまったく違う国でも人々が生活している空間は、同じ人間の営みであるわけで、生活条件においてそれほど大きくは違わない。しかしその場の地理的な成り立ちや歴史、その背後にあるさまざまな人間関係がこの場を今現在の状態に形作っているのだとすると、それを改めてフィールドワークをし、徹底的にリサーチすることによって、その人たちの姿がより明確に見えてくる。それを自分なりに解釈し、作品行為のサブジェクトとして作品を組み立てる。そこで出来上がるものは、私が見て感じた、まさにそこで生活している彼らのことであり、彼らの日常のことであったりするわけである。と同時に、その中に彼らが見えなかったり考えられなかったことを、部外者である私がどこか少しでも具現化した時、彼らにとっては今までになかったものがその場にわずかばかり出現することになる。<sup>(2)</sup>

「地域の価値を掘り起こし、魅力を高める」ことをアートに託すという発想の根源にある重要な要素のひとつが、ファーレ立川で北川が実現し、都市計画学会賞（1995年）、日本建築美術工芸協会特別賞受賞（1995年）、都市景観大賞景観形成事例部門受賞（1996年）などを受賞するなど、内外から高い評価を得ることになったプロジェクトの存在と、それを支えた「サイト・スペシフィック」という方法論であったことはいうまでもない。

そして、北川は次の舞台へと歩みを進めることになった。「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」である。

## 第2章 大規模芸術祭

本章ではアートプロジェクトが昨今の乱立ともいえる状況に至るプロセスをみていく。まずは二大プロジェクトともいべき越後妻有地域を舞台とする「大地の芸術祭」と直島を中心に展開される「瀬戸内国際芸術祭」の成り立ちを整理することから始める。

「瀬戸内国際芸術祭」は、1988年に福武書店（現・ベネッセホールディングス）二代目社長の福武總一郎が直島町議会で発表した「直島文化村構想」から始まった民間企業主導のプロジェクトに始まり、「直島国際キャンプ場」（1989年開業）、「ベネッセハウス」、「直島コンテンポラリーアートミュージアム」（ともに1992年開業）などを経て、2010年から3年ごとに開催される世界的なアートプロジェクトである。

ベネッセは進研ゼミなどで知られる教育産業をドメインとする民間企業であり、直島で始めた文化村構想も、当初は子供たちを対象とする教育事業を目的としていたという。しかし、直島での事業の構想段階から美術作品の活用は視野に入っていたようだ。それは「直島国際キャンプ場」の監修が安藤忠雄に委ねられたことからもうかがえるが、その3年後に開業した美術館併設のリゾートホテル「ベネッセハウス」は、安藤忠雄に設計が委ねられることになった。ここから現代アートの島として直島は世界的な名声を獲得し、さらに近隣の島々にもアートプロジェクトを広げていった。結果として、「瀬戸内国際芸術祭」が開催されていない期間にも非常に多くの観光客が国内外から訪れる一大観光地となった。また、その効果はそれ以外の分野にも及び、地域の活力が回復し、住民の生き生きとした姿が蘇ったともいわれる。福武總一郎は、このプロジェクトを「地域再生のモデルとなる」ものにしたいと述べ、さらに次のように語っている。

アーティストは、その土地でしか成立し得ない唯一の、現代批評のメッセージ性を持った作品をつくる。そこに島民が参加する。アーティストは立ち去っても作品は残り、作品を見に島外から若い人がやってくる。そうすると、おじいさん、おばあさんは、アートやアーティストについて滔々と語り始め、若い人は腰を抜かすわけです。そのシチュエーションがすごく面白い。そのうちお年寄りも作品のみならず、島の歴史や文化についても語るようになる。なかには、おばあさんが口紅を塗ったり、髪をとくしたり、おっしゃれをして生き生きとしてくる。奥さんをなくし10年たった74歳のおじいさんに、直島が大好きな26歳の京都の女性が言い寄って仲良くなった。その奇蹟のような話は島中に伝わり、多くのおじいさんたちに希望を与えました。<sup>(3)</sup>

しかし、当初からアートプロジェクトと地域振興あるいは地域再生という概念が結びつけて考えられていたわけではなく、それがプロジェクトを進める側の人々の間で明確に意識されるようになったのは、1998年に第1作目が完成した「家プロジェクト」（空き家をアートとして蘇生させるプロジェクト）を進める過程からのことであったようだ<sup>(4)</sup>。

当初から直島町が一定のサポートをしてきたというが、香川県などを含めた地元行政、経済界が本格的なサポートに乗り出したのはそのあたりからだったとかがえてよいだろう。

一方、新潟県越後妻有の「大地の芸術祭」は、新潟県県庁が主導するプロジェクトとして始まった。しかし、新潟県庁に福武總一郎のような美術愛好家が存在したわけではないようだ。過疎化、経済の沈滞に悩む地域の再生策を検討する過程で、都市再開発の成功事例として評判が広がっていた先述の「ファーレ立川」に視察団が派遣されたことを契機として始まったプロジェクトであったという。（北川、2017）

その経緯を澤村明らが『アートは地域を変えたか 越後妻有大地の芸術祭の13年 2000-2012』<sup>(5)</sup>にまとめている。それによれば、大地の芸術祭は「ニューにいがた里創プラン」という「新潟県独自の地域振興策」で取り組まれた「越

表1 越後妻有、直島町の人口推移

	1950年	1970年	1990年	2000年	2010年	2015年
直島町	6,667	6,007	4,671	3,705	3,325	3,139
越後妻有	125,963	101,457	83,893	77,422	69,792	64,946

出典：総務省「国勢調査」

後妻有アートネックレス整備事業」の一つとして現在の十日町市、津南町（旧区分では十日町市、川西町、津南町、中里村、松代町、松之山町）が連携して実施主体となった事業である。「ニューにいがた里創プラン」とはそもそも高齢化、過疎化により衰退した「僻地」対策であり、「財政資金を投入する」公共事業である。したがって新潟県は「大地の芸術祭」各回の実施後に経済効果を試算している。

第1回開催時に県が負担した費用は約2億8千万円、市町村が負担した費用は約1億9千万円であったが、それらは回を追うごとに軽減され、第4回目からは県の費用負担はなくなった。市町村の負担金も逡減しており、かわってチケット収入などの増加で安定した事業収入が得られているようである。2000年に始まり、2018年も開催されたことからわかるように、行政及び県民、特に地元市町村民による一定の評価を得ていることがうかがえる。そうした評価には、地元住民の満足度など非-経済効果が及ぼす心理的効果の働きも無視することはできないと想像される。ただし、そうした地元住民の満足度が、世界的な知名度の獲得と芸術祭期間中及び期間外における観覧者、観光客など交流人口の増加にともなう様々な効果に起因するものであることも想像に難くない。ただし、地元住民が「現代アート」をどのように理解し、受け入れているのかということは、別途検証していく必要があるだろう。

また、「大地の芸術祭」によっても、越後妻有地域の人口減少、高齢化に歯止めがかかっていないこと（表1）も重要な課題である。

### 第3章 三河・佐久島アートプラン21

佐久島（旧・愛知県幡豆郡一色町、現・愛知県西尾市）は、三河湾に浮かぶ島である。一色の港からは距離にして10.8km、渡船で20分の距離にあるこの島の面積は1.81km<sup>2</sup>、海岸線の長さは11.6kmである。

1958年に篠島、日間賀島とともに「愛知三島」として離島振興法の離島振興対策実施地域に指定された。これら三島はいずれも三河湾の島であるが、篠島、日間賀島とは異なり、佐久島は歴史的に三河との結びつきが強い。また、篠島、日間賀島が高度経済成長期に観光開発を受け入れて、観光の島として賑わいを見せているのに対して、佐久島は夏の海水浴と釣りを除けば観光とは無縁の島として時を経てきた。そうした経緯もあり、他の二島に比べて佐久島の人口減少は著しく、1950年に1,551人いた住民は2018年12月1日現在227人となっている（表2）。高齢化率も6割近い。こうした現状についての問題意識を行政でも持っていたことから、バブル経済期にヨットハーバーの建設やゴルフ場開発の計画が持ち上がったようだが、いずれも実現していない。

そうしたなかで、1995年に国土庁（現国土交通省）が設置した委員会「良い風が吹く島が好き女性委員会」<sup>(6)</sup>による現地視察が実施された。同委員会メンバーと当時の一色町との懇談の場において、島の過疎化対策として「アート」を活用したプランのアイデアが提案された。この提案を受けて、一色町は同委員会委員長でキュレーターの岡崎珠子にプロジェクトのプロデューサーを委嘱し、国土庁と愛知県の支援を受けて、1996年に一色町主催、島の有志による「島

表2 佐久島、日間賀島、篠島の人口推移

	1950年	1970年	1990年	2010年	2018年
佐久島	1,551	787	493	271	227
日間賀島	2,601	2,622	2,397	2,051	1,897
篠島	3,785	2,807	2,352	1,763	1,658

出典：2010年までは国勢調査。2018年は佐久島が12月1日現在、日間賀島、篠島が11月末日現在の住民基本台帳による推計。

を美しくつくる会」共催で「弁天海港佐久島プロジェクト」が実施の運びとなった<sup>(7)</sup>。2000年までに「弁天海港佐久島アートフェスティバル」が3回開催された。しかし、これらのアートフェスティバルは暗黒舞踏派のパフォーマンスなどが主体であり、美術作品が島を彩るようになるのは、「弁天海港佐久島プロジェクト」に替わって2001年に「三河・佐久島アートプラン21」が始まってからのことである。

「三河・佐久島アートプラン21」のプランニングとコーディネートを手掛けるようになったのは、岡崎市で活動する有限会社オフィス・マッチング・モウルの内藤美和と池田ちかであった。二人ともに地元で生まれ、育った。この二人が事業を引き継ぐにあたり書いた決意文が同社のホームページに掲載されているので引用する。

2001年の今年、一色町が主催し、地域の活性化を目指す佐久島の有志による『島を美しくつくる会』が中心になって、「祭りとアート」をキーワードに年間を通してさまざまな地域活性化事業が開催される運びになりました。この事業では、島民と島外者の交流の場を増やすために、アーティストによる美術展やワークショップを予定しています。また、展覧会の開催を、佐久島でおこなわれる祭事と時期を合わせ、内容に関しても、あえて双方がコラボレート（協働）できるような企画になっています。

「島がアートを引っ張り、アートが島を引っばる」。事業は、島とアートがお互いにインスピレーションやエネルギーを与え合うことで、活性化への一歩を踏み出します。

(有限会社オフィス・マッチング・モウルHPより)<sup>(8)</sup>

この一文にはこの事業の目的が明示されている。島外からやって来るアーティスト及びアーティストが島で制作した作品と島の歴史＝祭事が相互に触発し合い、目の前にある島の自然と島の歴史によって育まれてきた島人の営みの豊かさ、美しさ、暖かさをその場に居合わせた人々に感応させ、想像力を解放し、来訪者と島民双方に大きなエネルギーが生み出されたることによって、それぞれが活性化すること。こうした変化をもたらす唯一の触媒となり得るものが「アート」にはほかならない、という意気込みを読み取ることができるだろう。

さて、こうしてスタートした「三河・佐久島アートプラン21」の催しの構成を直近の2018年を例にしてみると、アート作品の展示が年3回、年間通してのイベントが2本（「佐久島アートピクニック」、「佐久島弘法巡りスタンプラリー」）、短期のイベントが年6本あり、そのほかに島伝統の祭りが配されている。

「佐久島アートピクニック」で観光客が立ち寄りべきアート作品あるいは展示会は全部で24あるが、このうち2つは一色港側の「佐久島ナビステーション」内にあるため、島では22作品となる。「大地の芸術祭」、「瀬戸内国際芸術祭」という国際的な大規模フェスティバルの遺産として、世界的なアーティストの作品が残される越後妻有や瀬戸内海の島々と違い、年間一千数百万円程度の予算で運営される佐久島のプロジェクトが生み出した作品はすべて国内アーティストのものである。そのうちで人気の高い作品は南川祐輝が2004年に制作し、2013年に再制作した「おひるねハウス」であろう。

これらのアート作品の制作やイベントを通じて、徐々にマスメディアでも「アートの島」として紹介されるようになった。そして、2002年から制作が始まった平田五郎の「佐久島空家計画／大葉邸」が完成し、ほぼ現在の作品群がそろった2008年頃から観光客数は増加し始めた(図1)。2008年度に5万人だった観光客数は、2015年には10万人を超えることになった。その背景には「アートプラン」を運営する人たちの様々な努力や西尾市観光協会の活動などが認められよう。そして、ここに来て佐久島を舞台とする映画ができた。NHK BSプレミアムのドキュメンタリー番組『岩合光昭の世界ネコ歩き』で知られる岩合光昭が初めて監督した「ねことじいちゃん」(主演は立川志の輔)である。封切は2019年2月の予定だ。

年間の観光客数が10万人を超えた現在、一色港からの渡船は週末ともなると臨時便を運航するまでの盛況を呈している。そうしたなか、カフェや食堂などが数か所新たに開業した。そのうちの2軒は移住してきた若い女性が経営している。また、レンタルサイクルの店舗も開店するなど、観光客を受け入れる環境も少しずつ整ってきた。それにとともに、オーバーツーリズムという新たな問題が持ち上がることもなったようだが、島民も観光客が数多く訪れる状況に慣れてきたためか、最近ではそれへの批判は取まる傾向にあるようだ。

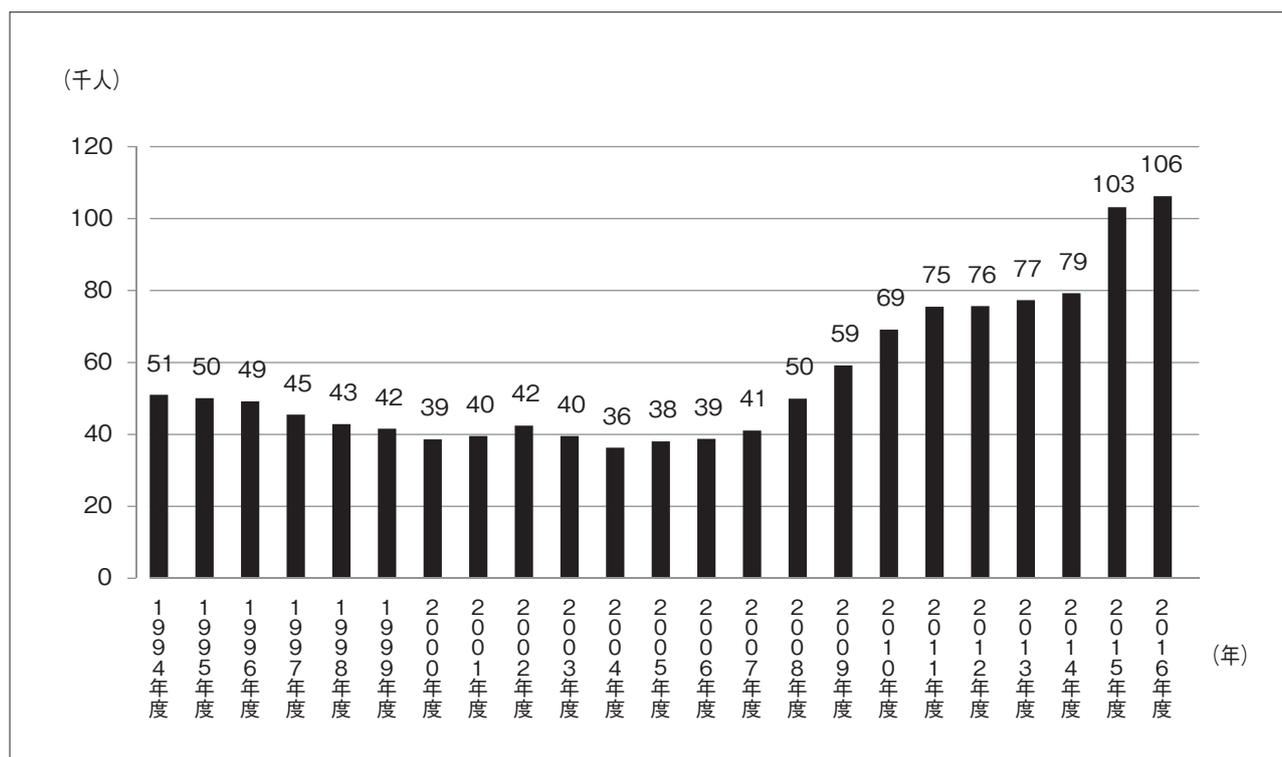


図1 西尾市渡船（一色港・佐久島航路）利用者数推移（観光客）

出典：「西尾市渡船 利用者数推移」

#### 第4章 佐久島の事例からみたアートプロジェクトの現状と展望

「三河・佐久島アートプラン21」によって観光客の数は大きく増えた。島の観光振興という観点からみれば、いまのところ大成功である。食堂やカフェはどこも混雑している。「アートの島・佐久島」の象徴ともいえる存在となった「おひるねはうす」には、写真を撮りたい観光客が行列をなしている。佐久島西港14時57分発の渡船は東港から乗船した客で混み合い、乗船待ちの客の半数以上が臨時便到着を30分以上待たなければならない。確かに2018年10月の日曜日に訪問した際もその通りのことが起こった。

しかし、観光客による賑わいの一方で、ここ数年の間に一目で空き家とわかる建物が目立つようになっていた。「アート」によって島の知名度は上がり、観光交流人口は目覚ましい増加を遂げ、アート作品の周辺には大なる賑わいがつくり出されたにもかかわらず、島のコミュニティはむしろ衰退へと向かう動きが加速しているような印象を受けた。こうした状況を証明するように、前述の通り「アートプラン」が始まった1996年以降も着実に人口は減少を続けている。また、この間に島へ移住した人の数は3～4名くらいに過ぎない。そうした移住者が現在の佐久島の観光事業を担い、カフェなどを経営している。だが、観光事業の基盤となる宿泊事業を新規に経営しようという動きはみられない。釣り客と海水浴客を相手に営まれていた民宿は、後継者不在などの理由で次々に廃業をしいたという。現在営業している宿泊施設は、1985年には24軒（旅館2軒、民宿22軒）あったといわれるが、現在は佐久島館、旅館鈴木屋など2軒の旅館と5軒の民宿の合計7軒。いずれも部屋数が10室に満たない。近隣の日間賀島では旅館15軒、民宿40数軒、篠島でも旅館12軒、民宿20軒以上が営業しているほか、飲食店、土産物店などの観光関連の事業所が数多く立地するのは雲泥の差がある。また、両島がタコ、フグなど豊かな海の幸に代表される観光ブランドイメージがしっかりと中京圏のマーケットに定着している。さらに、篠島、日間賀島が大マーケットである名古屋市から交通の便が非常に良いのに対して、佐久島への名古屋市からの交通アクセスははるかに悪い。船便の運航数も、使用する船舶の定員も少ない。そうしたこともあって、西尾市観光協会では蒲郡市のラグーナテンボス、西尾市の吉良温泉からチャーター船を出して団体旅行に対応しているが、大手旅行会社のパッケージツアーの多くは佐久島での数時間の散策を経て、日間賀島、篠島へ渡り昼食または宿泊をするパターンを組むことが多いようだ。「アートの島・佐久島」が

新しい観光コンテンツとして三河湾への旅行を誘う役割を果たしながら、経済的な効果は近隣の観光地に譲るという状況に甘んじているのが実情であるようだ。

このような状況を生み出した原因が、以下の2点にあることは間違いないだろう。

- ①日間賀島、篠島と並んで島の産業を漁業から観光業へ切り替える機会を逸したこと
- ②その間に過疎化と高齢化が同時に進み、アートの島として観光交流人口の増加では著しい成果が得られたものの、すでに島の住民の間に観光事業を新たに起こすだけの力が失われていたこと

観光事業を推進する基盤が形成されていない土地で、観光交流人口の急激な増加を実現したとしても、それに対応する受け入れ体制が構築されなければ、それほど長い時間を経ずして観光地としての人気に陰りがみえることは必定と考えられる。

なお、佐久島の現状をもう少し細かく分析すると、「アートプラン」開始後に開業した比較新しいカフェなどの多くが、定休日を「不定期」としていることがわかる。なかには週末や夏休みなどの特定期間にだけ営業する施設も見受けられる。そうなっている理由として、第一に考えられることは観光客数の季節変動、曜日変動が大きいことであろう。

そして、年間10万人となったとしても、その大半が朝の便で入島し、15時前の便で島を出る日帰り客であり、一人当たりの滞在時間が短いことがさらに観光事業者の事業意欲を阻害する要因となっていることが推察される。

「アートプロジェクト」によって、交流人口の増加(=観光振興の促進)はできても、必ずしも「まちおこし」を実現するとは限らない、ということがこの事例からみてもわかる。また、何をもって「まちおこし」の成功か失敗かの判断を下すためには深い議論が必要となる。しかし、ここではとりあえず地域の人口の増減をもってその指標とすることとして評価すると、佐久島は先にみたように、1990年から2010年にかけて人口は493人から271人へと大幅に減少し、その後もいくらかペースは緩やかになったとはいえ、減り続けている。一方、「大地の芸術祭」の越後妻有地区(十日町市、津南町)、「瀬戸内国際芸術祭」の直島町においても、芸術祭開始後も人口減少は続いている。(前出の表1参照)

観光客数を増やすことはできても、それだけでは「まちおこし」には繋がらないということが、佐久島に限らず「アートプロジェクト」の限界ともいえるだろう。しかし、観点を変えれば、アートプロジェクトによって現代アートという新しい観光資源の開発とそれを媒介にしたその土地の楽しみ方、すなわちその土地の風物、文化や歴史の観方を新しく提案したという点では十二分に使命を果たしていると評価することができるだろう。第一の課題は、「アートプロジェクト」が「まちおこし」の即効薬とはいえない、ということである。

この問題と関連して、第二の課題が浮かんでくる。

「アート」は地域の観光促進では成功を収めた事例が佐久島など全国的にみられるが、それらは必ずしも地域おこし、まちおこしにおいて成功をもたらすわけではないという疑問符がつく。しかし、すべてといってもよいくらい多くの「アートプロジェクト」がそれらを事業の最重要の目的として掲げている。そして、決定的なこととして、その多くに「なぜアートを活用するのか」という視点が、残念ながら抜け落ちているようにみえる。では、一体地域における「アート」とは、どのようなものであると考えるべきなのか。この問題について、社会学者の北田暁大が的確な整理をしているので紹介したい<sup>(9)</sup>。

地域系アートは地域社会のあり方を、アートを通して、アートにおいて問い返していく試みであり、また「社会」との接触においてアート自身の変容を迫られる、そうした再帰的な実践であると言える。というか、そうであるはず、そうでなければならぬはずだ。アートによって社会の日常に異和をもたらす、日常そのもののあり方を問い返していくとともに、アートそれ自体が社会との関係を「アートであるがゆえに可能である」という自律性を踏まえながら捉え返していく契機。そうしたものが、地域系アート、あるいは特定の地域を舞台としたリレーショナル・アートの眼目である。言うまでもなく、さまざまな地域でその実践は「成功」を収め、今では把握しきれないほど数多くの取り組みが、日本全国の至るところで行われるようになってきた。東京五輪の開催に向けて、今後こうした動向はますます加速していくだろう。

北田はさらに、「まちおこし」や「経済効果」というアート以外でも代替が可能な「機能」としてのみ活用されている「成功」事例が少なくないと推測し、そのために活用するというのであればアート以外の代替機能、例えば公共事業などの方が効率的であろうとまで指摘しているが、同感である。

佐久島の事例でも、「アート」への思い入れが端から存在したわけではないというのは先に書いたとおりである。事業の推進を受託したキュレーターの考え方には、理解を示す行政の職員も現れたという。島民の中にも理解を持つ人が出てきた。「アートプラン」の趣旨と活動内容に共鳴して移住してきた人も僅かながら存在する。ボランティアとして、数多くの学生や社会人が島での様々な事業に参加してきた。また、黒壁運動<sup>(10)</sup>や里山づくり<sup>(11)</sup>などの島の活力再生へ向けた取り組みは、「島を美しくつくる会」が中心となっていまでも続けられているが、これとアートプランが間接的に連携をしている様子もうかがえる。

その一方で、島民のアート作品に対する関心の薄さがうかがえることも気になるところである。もともと低予算の事業であり、日常的に作品と接する機会のある島民の様々な協力、例えば屋外展示された作品の清掃など誰でも対処できる事柄などを期待したいところだろう。アートプロジェクトに島民が深く関与し、アート作品を自分たちのものとして理解し、受容することがあってはじめてその土地に根付くはずである。そうなったとき、先述の福武總一郎の言うところの「おじいさん、おばあさんは、アートやアーティストについて滔々と語り始め、若い人は腰を抜かす」というような水準を遥かに超える地平が地域に開かれるのではないだろうか。

しかし、佐久島で見た光景は違っていた。

「佐久島空家計画／大葉邸」の建屋外壁に蜘蛛の巣と枯葉がこびり付いているのを見たとき、島民にとってアート作品は「お上」が設置したもので、それによって大勢の観光客が来島するようになったものの、自分たちの日常生活とは無縁の存在であるかのように受け止めているのではないかという憶測が浮かんだ。

だが、美術館が身近な存在とはいえ環境で育った島民に、しかも抽象性の高い現代アートへの理解をいきなり求めることの困難さには、少し考えれば気づくはずである。そして、島における島民（ひょっとして多くの観光客も）へのアートへの理解を浸透させようとするならば、次世代かその次の世代に代替わりするのを待たねばならないのだろう。

地元の文化や風土をよく知るオフィス・マッチング・モウルの内藤や池田に対してでさえ当初は警戒心を見せたといわれる佐久島の人々とは、ほどなくして打ち解けた話ができ、様々な協力を依頼できる関係が構築できたというが、最後まで埋めることのできない溝があるとすれば、アートへの理解を共有するという点においてではないだろうか。

アートを活用した観光振興は比較的容易であったとしても、本質的な地域おこしをめざすのであれば、世代を超える長い時間、ひょっとすると100年位の時間を見据えて取り組むだけの覚悟が必要になるであろう。これが第2の課題である。

## おわりに

アートプロジェクトを評価する姿勢として、プロジェクトを主催、運営する側の思いとプロジェクトを受け入れる地元住民及びアート作品を目当てに来訪する観光客の思いをともに知る必要がある。これは観光事業一般を評価する際の基本的な考え方であると私は考え、これまで実践してきたつもりである。

主催者や運営者の考えていることについては、書籍や本人へのインタビューでかなりのところまで知ることができる。しかし、地元住民や観光客となるとそうはいかない。本稿を執筆するにあたり、後者についての考察は主催者や運営者の書いたテキストやインタビューの口述記録にほとんど負うものに過ぎず、調査はまったく不足している。また、主催者や運営者の言説を鵜呑みにすることも軽率の誹りを免れない。この点について、川俣正が北川フラムの言う「芸術祭で地域のおじいちゃんおばあちゃんが元気になった」ということを検証するために、精神科医の出張カウンセリングを越後妻有の集落で実施したというちょっと痛快な逸話もあるくらいである<sup>(12)</sup>。

本稿は、そうした意味でも、今後研究すべき方向性を自分なりにまとめたノート以外の何物でもないことを最後に記しておく。

付表 2016年から2018年に開催された主なアートフェスティバル一覧表

名称	会場	期間	第一回開催年月日
大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2018	越後妻有(新潟県十日町市、津南町)	2018年7月29日～9月17日	2000年
BIWAKOビエンナーレ2018 きざし～BEYOND	滋賀県近江八幡市	2018年9月15日～11月11日	2001年
ヨコハマトリエンナーレ2017	横浜市	2017年8月4日～11月5日	2001年
中之条ビエンナーレ2017	群馬県中之条町	2017年9月9日～10月9日	2007年
亀山トリエンナーレ2017	三重県亀山市	2017年9月24日～10月15日	2008年
水と土の芸術祭2018	新潟市	2018年7月14日～10月8日	2009年
六甲ミーツアート 芸術散歩2018	神戸市	2018年9月8日～11月25日	2010年
瀬戸内国際芸術祭2016	香川県の瀬戸内海各所	2016年3月20日～4月17日、 7月18日～9月4日、 10月8日～11月6日	2010年
あいちトリエンナーレ2016	名古屋市、岡崎市、豊橋市	2016年8月11日～10月23日	2010年
国東半島芸術祭	大分県豊後高田市、国東市	2014年10月4日～11月30日	2012年
いちばらアート×ミックス2017	千葉県市原市	2017年4月8日～5月14日	2014年
みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2018	山形市	2018年9月1日～9月24日	2014年
札幌国際芸術祭2017	札幌市	2017年8月6日～10月1日	2014年
道後オンセナート2018	松山市	2017年9月2日～2019年2月 28日	2014年
するがのくにの芸術祭 富士の山ビエンナーレ2018	静岡県富士市、富士宮市	2018年10月27日～11月25日	2014年
さいたまトリエンナーレ2016	さいたま市	2016年9月24日～12月11日	2016年
アニッシュ・カプーア IN 別府	別府市	2018年10月6日～11月25日	2016年
KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭	茨城県日立市、高萩市、 北茨城市、常陸太田市、 常陸大宮市、大子町	2016年9月17日～11月20日	2016年
Reborn-Art Festival 2017	宮城県石巻市、塩竈市、 東松島市、松島町、女川町	2017年7月22日～9月10日	2017年
奥能登国際芸術祭 珠洲2017	石川県珠洲市	2017年9月3日～10月22日	2017年
種子島宇宙芸術祭	鹿児島県種子島	2017年8月5日～11月12日	2017年
清流の国ぎふ芸術祭 - Art Award IN THE CUBE 2017	岐阜市	2017年4月15日～6月11日	2017年
北アルプス国際芸術祭2017 ～信濃大町 食とアートの廻廊～	長野県大町市	2017年6月4日～7月30日	2017年

注

- (1) 北川フラム著『フェアレ立川パブリックアートプロジェクト 基地の街をアートが変えた』（現代企画室、2017）
- (2) 川俣正著『アートレス マイノリティとしての現代美術』P35～6（フィルムアート社、2006）
- (3) 福武総一郎+北川フラム著『直島から瀬戸内国際芸術祭へー美術が地域を変えた』P45（現代企画室、2016）
- (4) 秋元雄史著『直島誕生』（デイスカバー・トゥエンティワン、2018）
- (5) 澤村明編著『アートは地域を変えたか 越後妻有大地の芸術祭の13年 2000-2012』（慶應義塾大学出版会、2014）
- (6) 同委員会の構成メンバーは次の通り。委員長：岡崎珠子（アートプロデューサー）、委員：アン・マクドナルド（作家、ジャーナリスト、上智大学コミュニティカレッジ講師、カナダ出身）、猪爪範子（地域総合研究所主任研究員）、菊池薫（元ミスワールド日本代表、東京八丈島出身）、椎名桜子（作家、映画監督）、平山宏美（旅館経営、長崎県老岐島在住）。肩書は当時。
- (7) 白坂由里『島が主役の「三河・佐久島アートプラン21」』（「DNP Museum Information Japan “artscape”」2010年12月10日号）  
[http://artscape.jp/study/npo/1222092\\_2186.html](http://artscape.jp/study/npo/1222092_2186.html)、2018年12月1日アクセス
- (8) 「有限会社オフィス・マッチング・モウル」ホームページ。<http://www.m-mole.com/sakushima/what.html>、2018年12月1日アクセス
- (9) 北田暁大、神野真吾、武田恵子編『社会の芸術／芸術という社会』（フィルムアート社、2016）

- (10) 島を美しくつくる会が中心となって、島民や島外からのボランティアの手で、「三河湾の黒真珠」と称される西地区の黒壁集落の家々の壁をタールで黒く塗り直すプロジェクト。
- (11) 佐久島の東集落から歩いて行ける大島の梅園の手入れを島民、島外からのボランティアの手で行うプロジェクト。
- (12) 『美術手帖2017年7月号』より

#### その他参考文献

- ・小川希編『アートプロジェクトの悩み』（フィルムアート社、2016）
- ・熊倉純子監修『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』（水曜社、2014）
- ・暮沢剛巳著『現代美術のキーワード100』（ちくま新書、2009）
- ・北川フラム著『美術は地域をひらく』（現代企画室、2014）
- ・北川フラム著『ひらく美術』（ちくま新書、2015）
- ・坂本龍一＋創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会編『人と自然が響きあう都市のかたち』（平凡社、2014）
- ・佐々木良著『美術館ができるまで』（啓文社書房、2018）
- ・ジャン・ボードリヤール著、塚原史訳『芸術の陰謀 消費社会と現代アート』（NTT出版、2011）
- ・深澤孝史著『越後妻有民俗泊物館』（現代企画室、2016）
- ・福武總一郎、安藤忠雄ほか著『直島 瀬戸内アートの楽園』（新潮社、2011）
- ・宮津大輔著『現代アートの経済学』（光文社新書、2014）
- ・鷺田清一著『素手のふるまい』（朝日新聞出版、2016）

#### 以下、芸術祭公式ガイドブック

- ・『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2018 公式ガイドブック』（現代企画室、2018）
- ・『瀬戸内国際芸術祭2016 公式ガイドブック』（現代企画室、2016）
- ・『茨城県北芸術祭2016 公式ガイドブック』（生活の友社、2016）
- ・『北アルプス国際芸術祭2017 公式ガイドブック』（現代企画室、2017）
- ・『国東半島芸術祭 公式ガイドブック』（美術出版社、2014）
- ・『種子島宇宙芸術祭 公式ガイドブック』（美術出版社、2017）
- ・『奥能登国際芸術祭2017 公式ガイドブック』（現代企画室、2017）
- ・『いちほらアート×ミックス2017 公式ガイドブック』（美術出版社、2017）
- ・『REBORN ART FESTIVAL 2017 公式ガイドブック』（スターツ出版、2017）